
好きな人の名前。

一ノ瀬遊汰

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きな人の名前。

【Nコード】

N73210

【作者名】

一ノ瀬遊汰

【あらすじ】

付き合って数ヶ月。

俺には切実な願いがありました。

好きで好きで、告白してやっと実った恋。

別にキスしたいとかそういうのはなくて、ただ隣に居れるのが幸せだった。

でも、もし我が儘が許されるなら・・・

「名前で呼ばれてえなあ」

「なに？いきなり。いつも名前で呼ぶと怒るくせに」

「ちげーよ！三浦に呼ばれたいんじゃないかってさあ」

「は？」

「だから、俺は・・・その、さあ・・・」

俺が彼女を見ると三浦は「嗚呼」という顔で頷いた。

「篠原に言われたいってことね。お前、ほんと篠原好きだよな」

「当たり前だろー！彼女なんだからー」

「どこがいいんだよ、篠原のさあ」

「可愛いじゃん」

「可愛いか？アイツ、どっちかっていうとボーイッシュだろ」

「そうだけどさあ」

友達と居るときの雰囲気は少しふわっとしてて、でも喋り方とか行動はちよっと男っぽくて、でも男子苦手で少しでも喋ると真っ赤になって・・・嗚呼、もう！

「スゲー可愛い！」

「・・・惚気、最悪」

「お前がどこがいいんだよ、とか言っただんじゃん！」

「そうだっけ？ んで？ 篠原に名前を呼んでほしいんだっけ？ お前」
「そうそう。健気だろー、俺って」

「健気って言ってる時点で健気じゃありません。つか、だったら言えばいいじゃん。名前で呼んでって」

「いや、それがさ。名前で呼んでもいいよーって言ったら苗字すら呼んでくれなくなってさあ」

頑張って呼ぼうとしてるのは分かるんだけど、なんか苗字まで呼ばれなくなるのは辛いかな。
ってか、そこも・・・

「可愛いとか叫ぶなよ？ 鬱陶しい」

「え？ なんて分かったの？」

「お前、単純だからな」

単純？

単純なんだろうか。

でも、好きなものは好きだし、可愛いものは可愛い。
だから、呼んで欲しいものはやっぱり呼んでほしい！

「なあ、篠原」

「あ！ あ・・・」

篠原は俺の名前を言いかけて真っ赤になって俯いてしまった。

あー、可愛い。

駄目だ！ 可愛すぎて死にそう、なんて言ったらまた三浦に呆れられるかなあ。

「どうしたの？」

「嗚呼、今日一緒に帰れる？」

「う、うん！帰れるよ！」

「んじゃ、放課後なっ！」

「う、うん！」

あー、なんか嬉しい。

二人で一緒に帰れるとか、これはもう付き合ってる特権だろ？

俺はこれだけで幸せなんだ。

他の奴らはもっと進展しろよ、とか言うけどこれでも十分だって！
あとは、名前呼んでくれればもう最高！

「なんでお前ってそんなに名前にこだわるの？」

「俺、俺の名前嫌いなんだ」

「知ってるよ。名前呼ぶと怒んじゃん、お前」

「でも、嫌いだけどさ、やっぱ名前って特別じゃん？だからさあ、好きな人には呼んでほしいの。分かる？」

「それは、好きな奴が居る奴の特権かもな」

「特権、かあ」

「よっしゃ！放課後！」

授業が終わるとともに俺は勢いよく篠原のところに駆け寄った。

「帰ろうぜっ！」

「うん」

「それでさあー、三浦な奴ったらさー」

「あ、あの！」

「ん？」

珍しく篠原が俺の話しに割って入った。

いつもならニコニコして頷くだけなのに。

「わ、私・・・一生懸命、の、野木くんの名前、呼ぼうとしたの！」

「うん、知ってるよ？」

「で、でも全然呼べなくて・・・」

「うん」

「でもね、私、い、今頑張ってみようと思うの！」

「うん」

「そしたら、ね・・・？」

「ん？」

「私お願い、聞いてくれる？」

あんまりにも篠原が真剣で必死だったから、別れ話でも切り出されるのかと思って一瞬怖くなった。

でも・・・

「うん、いいよ」

俺の我が儘だけ聞いてもらうのなんて、ズルいもんな。もし別れ話だったらまた好きになってもらおう。

俺にはまた惚れさせる自信あるし！だって、振り向かせるあの時間だって楽しいから。

「ちょ、ちょっと待ってね」

「ゆっくりでいいけど？」

スゥー、スゥー、と篠原の深呼吸の音が聞こえる。一生懸命なのが伝わって、なんか、なんか・・・！

「あ、葵・・・くん」

もう駄目！

「の、野木くん?!」

俺の行動に篠原は目を白黒させるけどもう関係ない！
だって、もう無理だった。

限界だった。

名前を呼ばれることがこんなに嬉しいなんて・・・！

「あ、あの・・・野木くん、苦しい・・・」

「あ！わりいー」

「び、びっくりしたあ」

「ごめんな」

「う、ううん。嬉しかった、から」

耳まで真っ赤な篠原は、ほんと可愛くて。

「それで？篠原のお願いって？」

「あ、あのね・・・わ、私の名前も呼んで欲しいの！」

「へ?」

「あ・・・やっぱり、我が儘だった、かな？」

嗚呼、もう・・・！

篠原の馬鹿っ!!

「いいに決まってるじゃん!つか、俺、呼んじゃ駄目なのかと思っ
てた!」

「な、なんで？」

「だってなんか・・・図々しいかなあって」

「そ、そんなことないよっ！」

「じゃあ・・・」

嗚呼、ほんとだ。

篠原が緊張すんのも分かる。

好きな人の名前呼ぶのって、こんなにも緊張するんだなあ。

「美咲・・・！だーいすきっ！！」

うわっ、美咲の顔真っ赤！

見たこともないほど真っ赤！

可愛い、可愛い、可愛い！

「あ、ありがとう。野木くん・・・すごく嬉しい」

「やっぱさ、好きな奴の名前って特別だよな」

「う、うん」

「呼ぶのは緊張するし、呼ばれんのはスゲー嬉しいし！俺はこれからも美咲って呼ぶけど、美咲は無理して俺の名前呼ばなくてもいいんだぜ？」

「で、でも・・・私も呼びたい！スラスラ言えるようにはすぐにはなれないけど・・・でも、野木くんに名前呼んでもらって分かったから！すごく嬉しいって」

俺は自分の名前が嫌いだった。

女みたいな名前で嫌いだった。

こんな名前なくなればいいのって思った。

でも、今は違う。

君が呼んでくれる名前。

どんなに女っぽくてもいい。

君が呼んでくれるなら。

大好きな君が呼んでくれるからこそ、この名前に意味がある。

(後書き)

ただ惚気話を書いてみたかっただけなので、
g d g dなのは許してくださいw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7321o/>

好きな人の名前。

2010年11月6日00時01分発行